疵傷阿石 冬兒立閻鴉 三編

京文舍 文京編輯

假名垣魯文校閲

守川周重圖畫

A486
3上

<48-82727

冬兒立閻魔第三編之序

人ハ三寸の舌ヒヌヒ五尺の躰ヒ破損し車ハ三寸乃楔ヒころ〳〵千里ハ道ヒ飛行キヒ昔々在下ガ耳朶ヲ觸ルる教訓ゴ〳〵星移り霜遷りヒも教ハ動ク及社會の楔巻中ハ玄婦痲傷阿石克人ヒ脳殺ヒる乃風情ヒ遂ホ三寸の毒舌ヨヒ其身ヲ廻る因果車血ヒ分ヒ子ヒ苦しめて繫く綺綱の紐ヒ断つ公明正大法理ヒ伏し十有余年乃其間久しく籠鳥の苦ヒ常し意馬ヒ狂ヒ及猿若街絃妓小竹ガ自由ヒ為る勧善懲惡乃讀切冊子文京ヱヲ妙筆の閻ホ礑ヲ筆の文首尾能評ヲ版元ヒ編者ヒ実入ハ多く乃ヒ結サし披閲くと三編の發刊同ト硯の苦海の在下魯翁ガ序文の代理ヒ誌三寸の舌ヒ法螺ヒ吹き墨壺の筆ハ三寸ヒ千里の道ヒ飛行キるいろは新聞の素着夫

明治辰の五月

彩霞園柳香ホ 戯ヒヒ序ハ

冬兒立閻魔

歸久師ヒ

三編上の巻

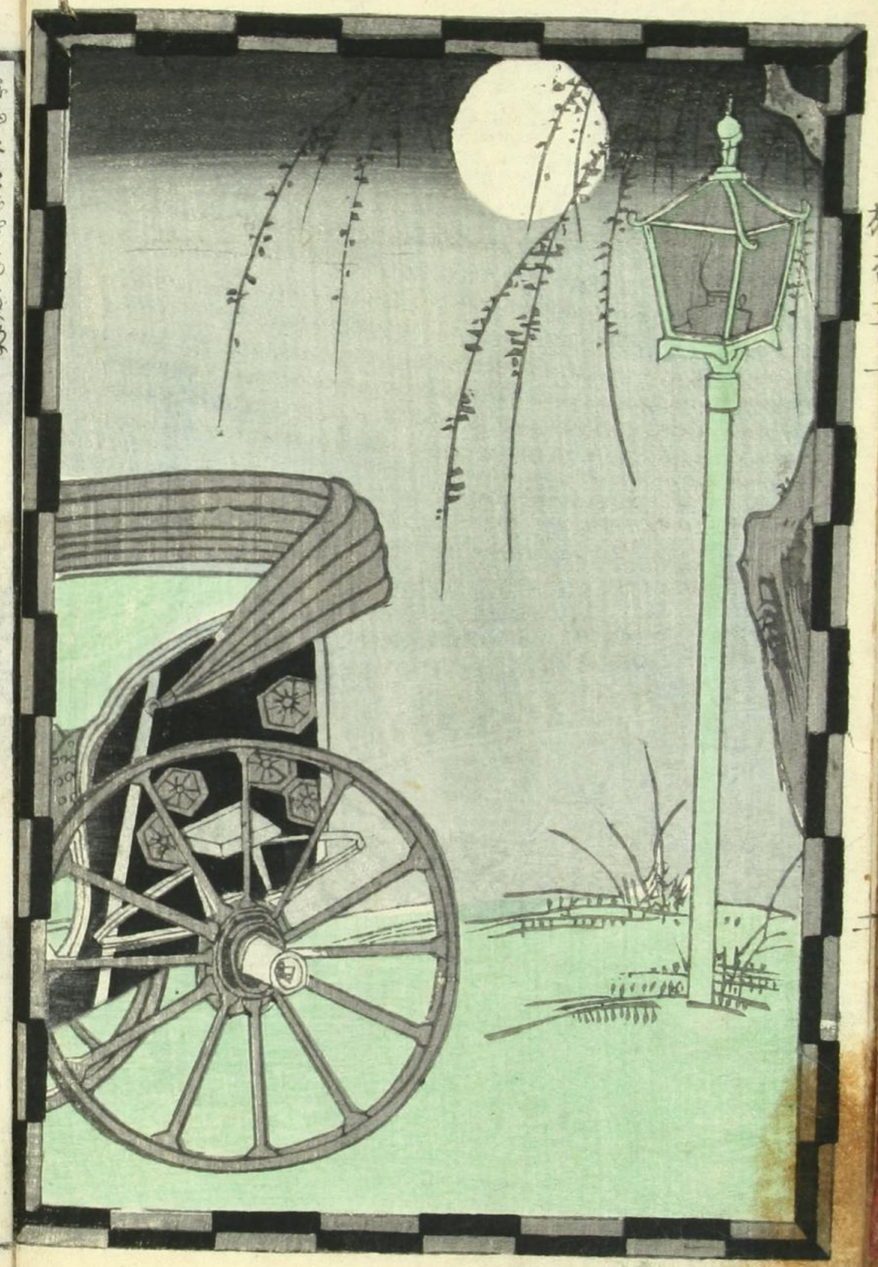
かゝ筆場乃文閣

久京ヒ文京錦

守川陶市ヒ画

書肆ハ加ヒ吉板

孝女小女子
妻婦おいー



冬の児立闇駒第三編上之巻

東京　假名垣魯文校閲
京文舍文京著述

偖もお子くい母お石へ等閑なく看病ふ某の功驗空しく数ケ所の疵も頼ふ癒え漸くに快よく形くれど形ち残ふ恐るべい赤岩へ対し怨うらみ深い立花屋も断念り忍ばべ
内外の物あれるまゞと小竹ゞ
お石なれど赤岩が暴行思い深く恐ろ事なれば態と切ず去る
仲為く兄夜仲裁に入り〳〵祝吉ふ彩を強ひ若情のあれやと
立花屋とかいしが間い事なく縁切の約をかい〳〵一ト先故々の
東金へ立帰りしい明治五年の春暮の司法卿
江藤新平岩の遠望により花御東縁の悪弊を除れ花嫁奴　次へ

▲或日婦人

その後ゝ濃り
一人の箱屋
を借る連
一日の
容子
ふる
情ひ
かるく
素金の呵
ぶ事りある
料理屋へ立

解放の令大政府
達せられ紙の書る所
まぐめ
はゞめて自由の
空氣を吸し

○羽を伸ん
ゝ
恵をふあの
丸鏡を出し傷痍とりる

◐
実父
白井
の
捜ふを
ゝ
ふ令へ兄弟と
改姓ず
苦事ふ
て居るこの
自然
安堵いふ
ゝられと
長男を母の
不孝ふ
料理屋へ立

◐父実の
分へ立あぐろ
自然縁の
父とあり」が
形ちるにつみ
父親を慕ふ
の念い頻りなれば▲

つぎ川柳
の憂情つと
めの一伍一什定めて
耳ふ入りしーふとん
ちちとしたび直面ほど
逆
芝居の娘
ちくちりとしたる安うん
面ぶせうり弾丸まごと
いろとしたも
あるとしたも
昌瀬ふめ逢
と紙うん
と長あ
年月
慕ひ
て
く
ん
め
中
一服
鼠
駕子
の縁
再び
結んで
ト
あるて変
まを寄しも
お形ぶ見えて
ちちうふれば
仮令ふ此嘘

つゞき 細々と女の筆の跡やさえねば

さすがに世をそむいし

と秀ホ徳ら め

ものそのとる

的女に児玉の

分つと見くと

伝ふくめて

拾せ

やしに

恵ふ

ゆく

ゆ女

過事

なれ

◐ 宋しきホ経過せ

甲斐のあうらうまと

婦しき中西田都ひしく

父の事

を待

る居う

○おうふ

ゆ

一ウ

かるべく又一ウ

おとく

の表情

一分ゆく

ホ長の

年月に

髪

吸ホ

つゝき

若侯も

又さんに

達ならうと ◐

まく

ふくぬ

ゆ

隠世ゆ

絵が云物ふ

云の墓や

今ハ我身に

ゆく

ゆ

ゆ

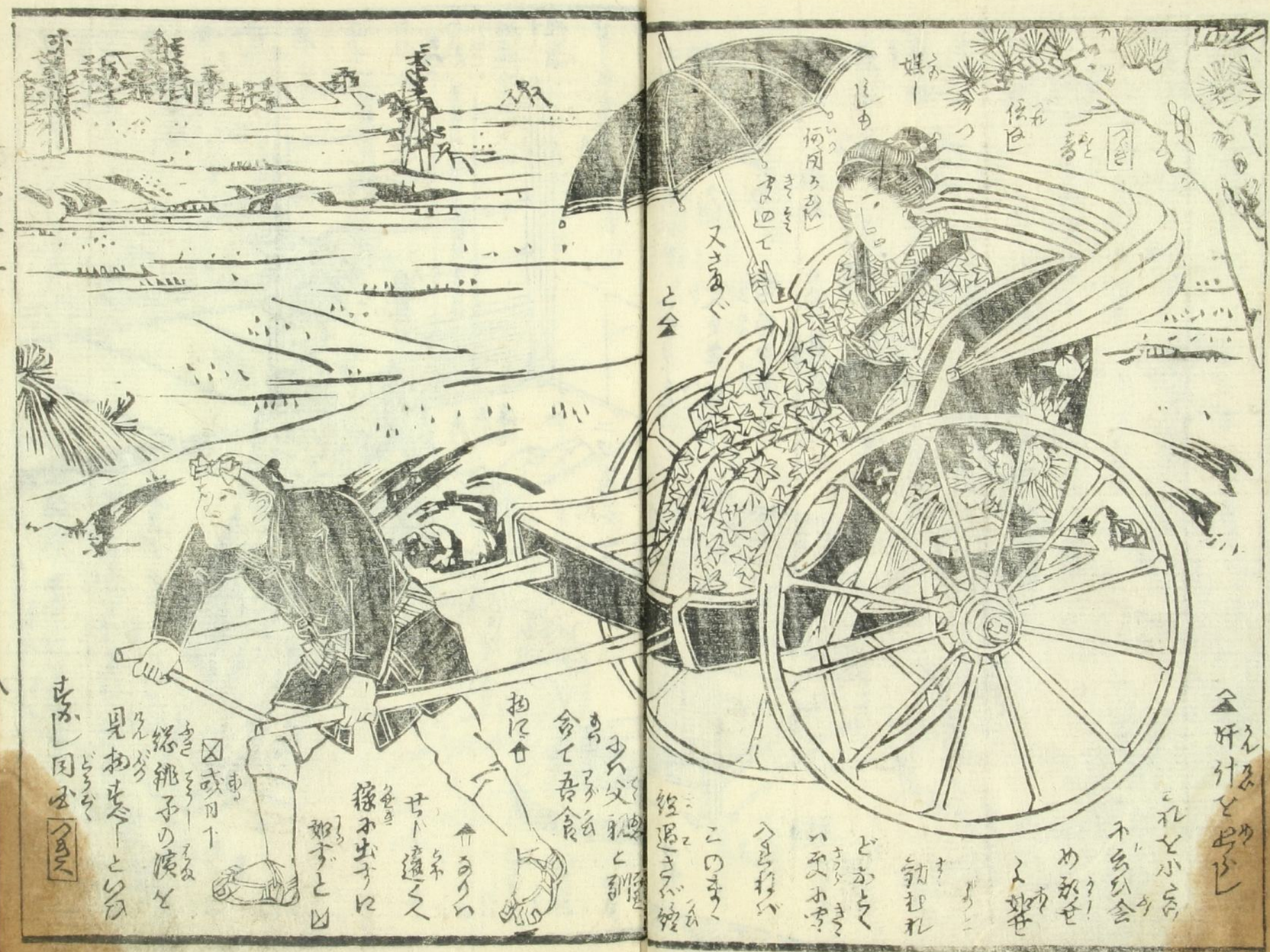
ゆ

江戸勝新平君

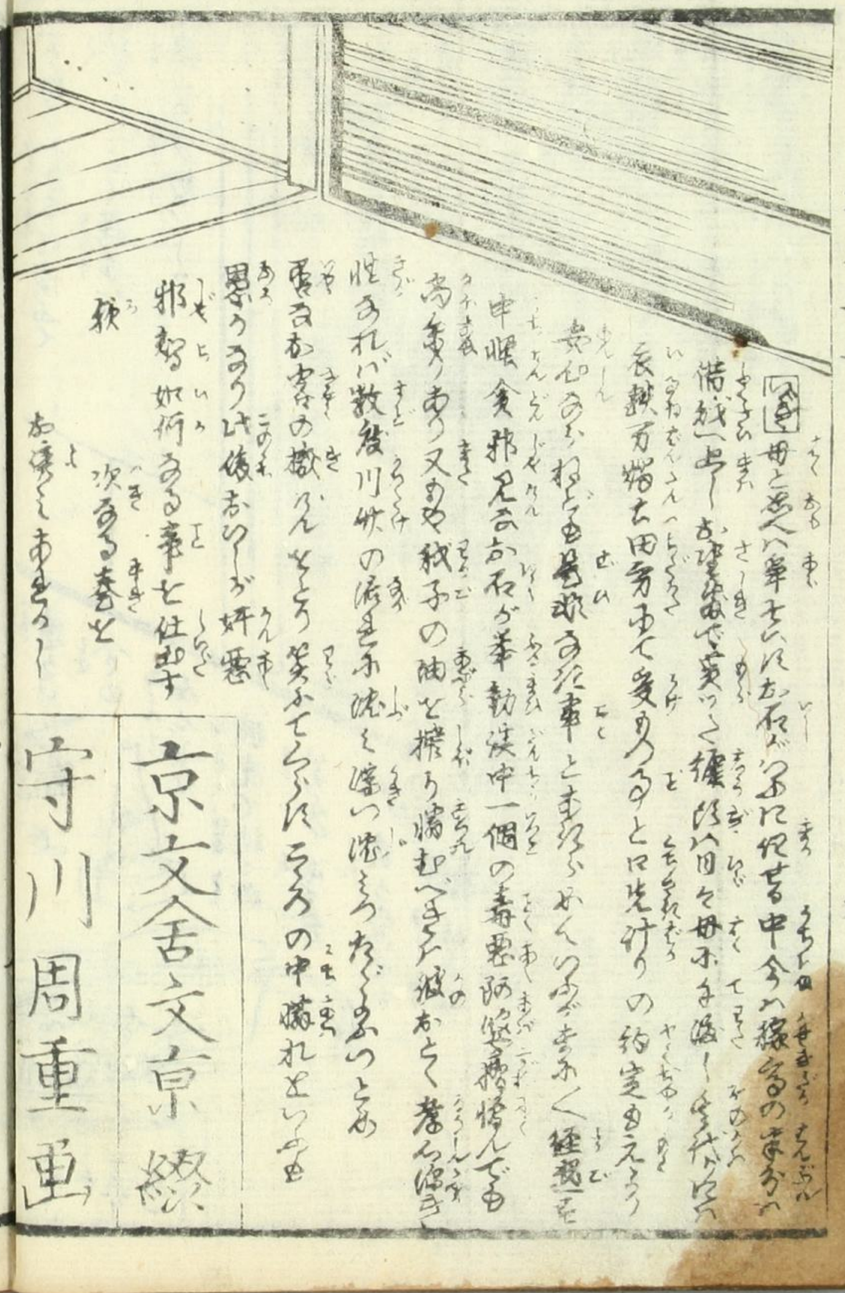
一付

父の年經へ

父の仇


これとかくの不合式会
めあるせ
人数
動むれ
どかとて
いつかまき
人数ものば
このまま
絵遍さば絵
ゆかたとかし
ゆ
ゆ
ゆ

仮宅
料理屋
あそび
十四
借金
仕方
二ツ屋
大くの金を借受け
と書おきイろ見
張紙
五十
八十
玉田と
お緑
つき
遊客
金の
威光で通る故
芸が売る
湊屋
紬の
乾き
岡
三十四
芸妓
夫より
根津と言る
上端の金
中旬の
出稼ぎ
仮宅と遊客出し再び新吉原の大変方へ
又



京文舍文京綴

守川周重画

新編西國奇談　廿編　追々出版

薄緑娘赤なみ　八編　追く出版

娘庭訓黄金の鶏　追く出版

御届

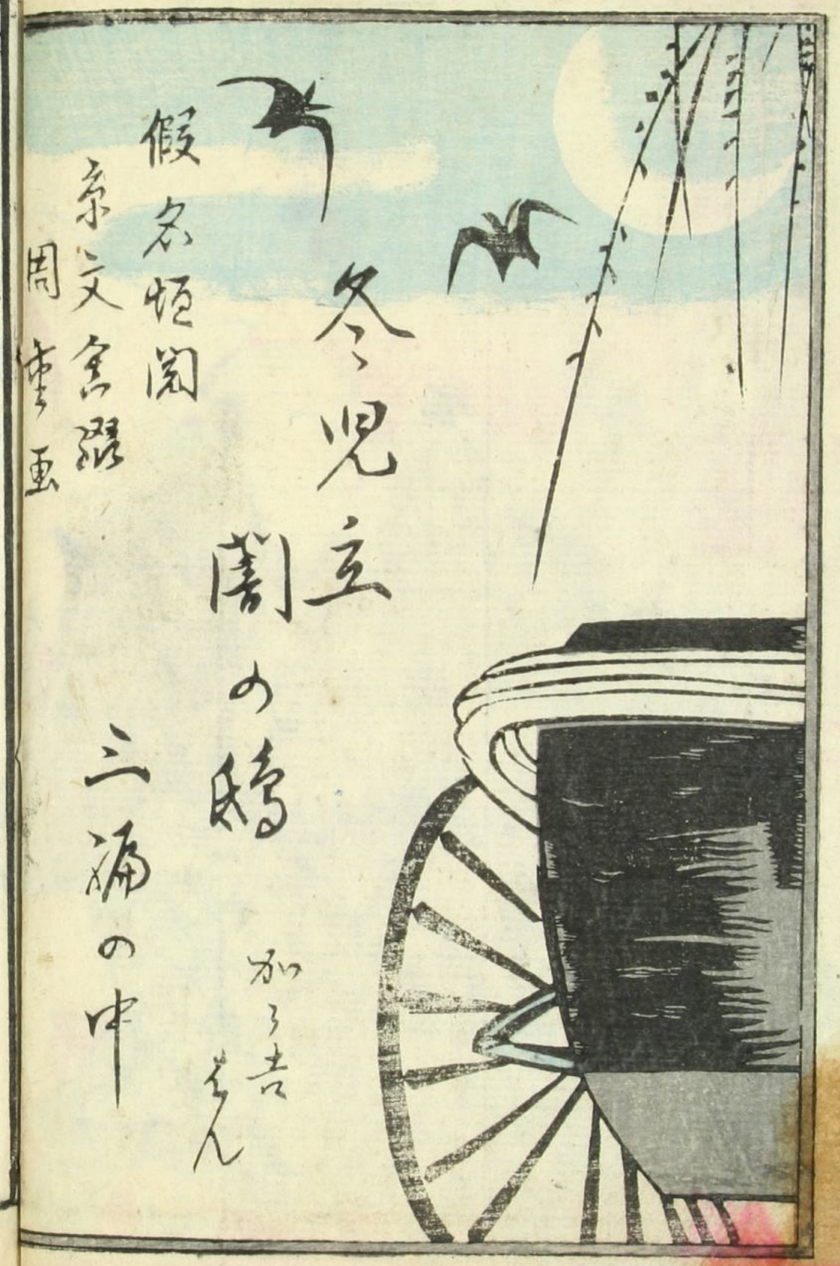
明治十一年十二月十七日

神田區仲町一丁目六番地　編輯人　篠田久次郎

日本橋區米沢町一丁目七番地　出版人　堤吉兵衛

地本錦繪問屋

冬兒之闇鴉
三編
大尾
中之巻



冬児立閨の鴉

三編の中

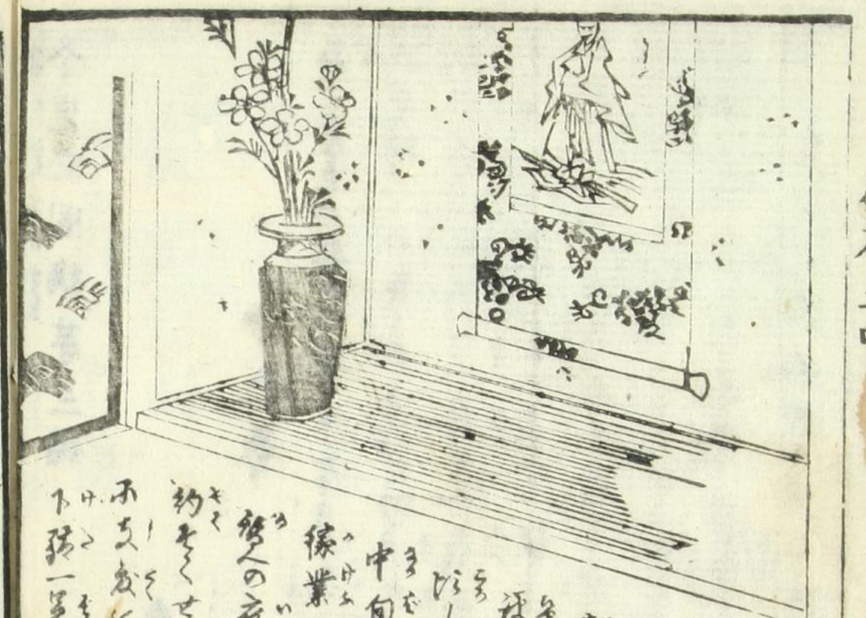
假名垣魯文
京文舎文京
閑雪画

冬児立閨鴉第三編

東京　假名垣魯文　校閲
京文舎文京　著述

中之巻

たゞ見まゝの形人の苦も苦き名者詰星ゝり閨ゝ紀我ゝ心ゝ人
人ゝ苦ゝぐの苦ゝ苦ゝ苦ゝ苦ゝの中ゝ紀ゝ取ゝ分ゝ藝ゝ者ゝ苦ゝ紀ゝ果
教ゝ苦ゝ代ゝ苦ゝ見ゝ見ゝ乳ゝ乳ゝ苦ゝ苦ゝ中ゝ乃ゝ苦ゝ苦ゝ人ゝ
笑ゝふゝく厭ゝ蛮ゝ蛮ゝ人ゝ言ゝく浦ゝく晴ゝし苦ゝ夜ゝ人ゝ締ゝり紀ゝ紀ゝ紀ゝ世
い苦ゝいゝもゝのゝく見ゝ湖ゝ也ゝ形ゝき苦ゝ対ゝのゝうゝ人ゝと晴ゝる紀ゝ苦ゝ人ゝ幸ゝ苦ゝ苦ゝ
藤ゝ蔦ゝる苦ゝ苦ゝの苦ゝ苦ゝ失ゝを苦ゝ知ゝり紀ゝ紀ゝ世ゝ界ゝの苦ゝ祝ゝ苦ゝ紀ゝ苦ゝと苦ゝ餅ゝる苦ゝ藝ゝ苦ゝ
苦ゝ苦ゝ苦ゝ紀ゝ紀ゝ斧ゝ紀ゝ紀ゝ生ゝ業ゝ苦ゝ苦ゝ紀ゝ苦ゝと苦ゝ知ゝり紀ゝ紀ゝ紀ゝ紀ゝ可ゝ番ゝ相
苦ゝ苦ゝ彼ゝの苦ゝ小ゝ竹ゝ苦ゝ仏ゝ苦ゝ苦ゝ紀ゝ苦ゝ女ゝ苦ゝ苦ゝ苦ゝ苦ゝ冊ゝ苦ゝ苦ゝ苦ゝ苦



☒ [illegible]解[illegible]ピンと　[illegible]

[illegible]の[illegible]　[illegible]

小竹い　稼業に仙[illegible]男　[illegible]小竹の

[illegible]　[illegible]

[illegible]期[illegible]　[illegible]

[illegible]しも明治十二年八月　[illegible]

中旬の事[illegible]　[illegible]

稼業の華英盛り　[illegible]

[illegible]人の衣類[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

「くき」長崎四名
つまかくまど
出る事
あらば
こと
を
ん
稼ぎ
業
わ
ろえ宅の
ふ
ど
富士
義太夫
交際
とか花ふ迫れい大怒り
狂ひ
長女
の
世界
の
心
芸妓
と
引
ん
稼ぎ
の
媚
世界
心
芸妓
と

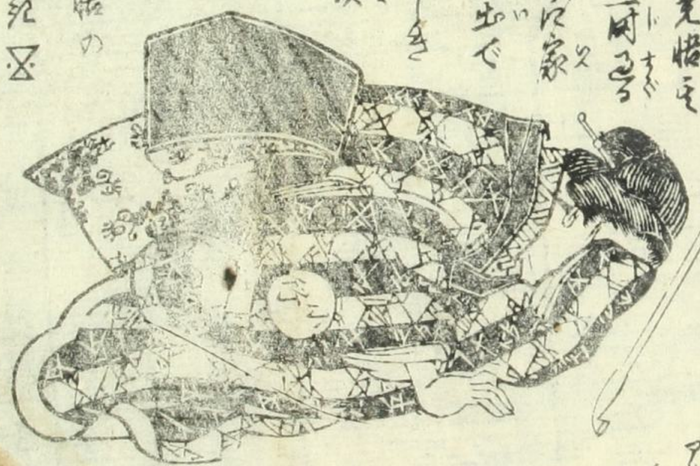
◐嵯峨へ出そうと紙帯を
あめんぢ偶然思ひ
出し
来々と旨い酒を飲ん
だれと殺々の人と出さも図

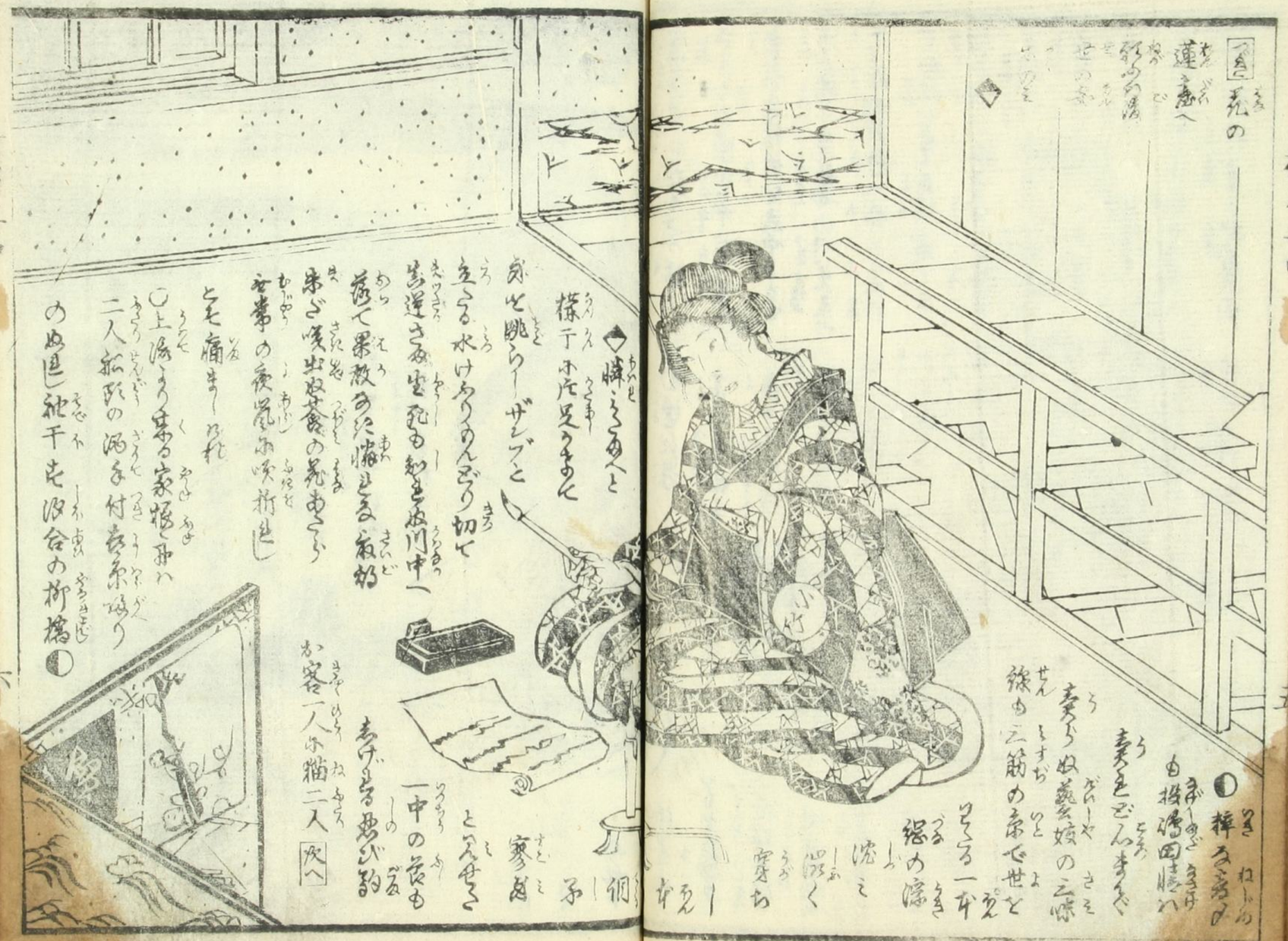
◐今此姉の
世話雑煮
といへば
数こ私しと書
しめ揚句の
たそに出さ
ありとへ
服紙を
紙
さう
お母さんと

図
はぶ働き
の奴
地あー
姫い
云ふ出て行けと

腹ん
親の
怒りと
そあひ止
まうて
父さん
お
しろう
ふまあ
らうと

十
石

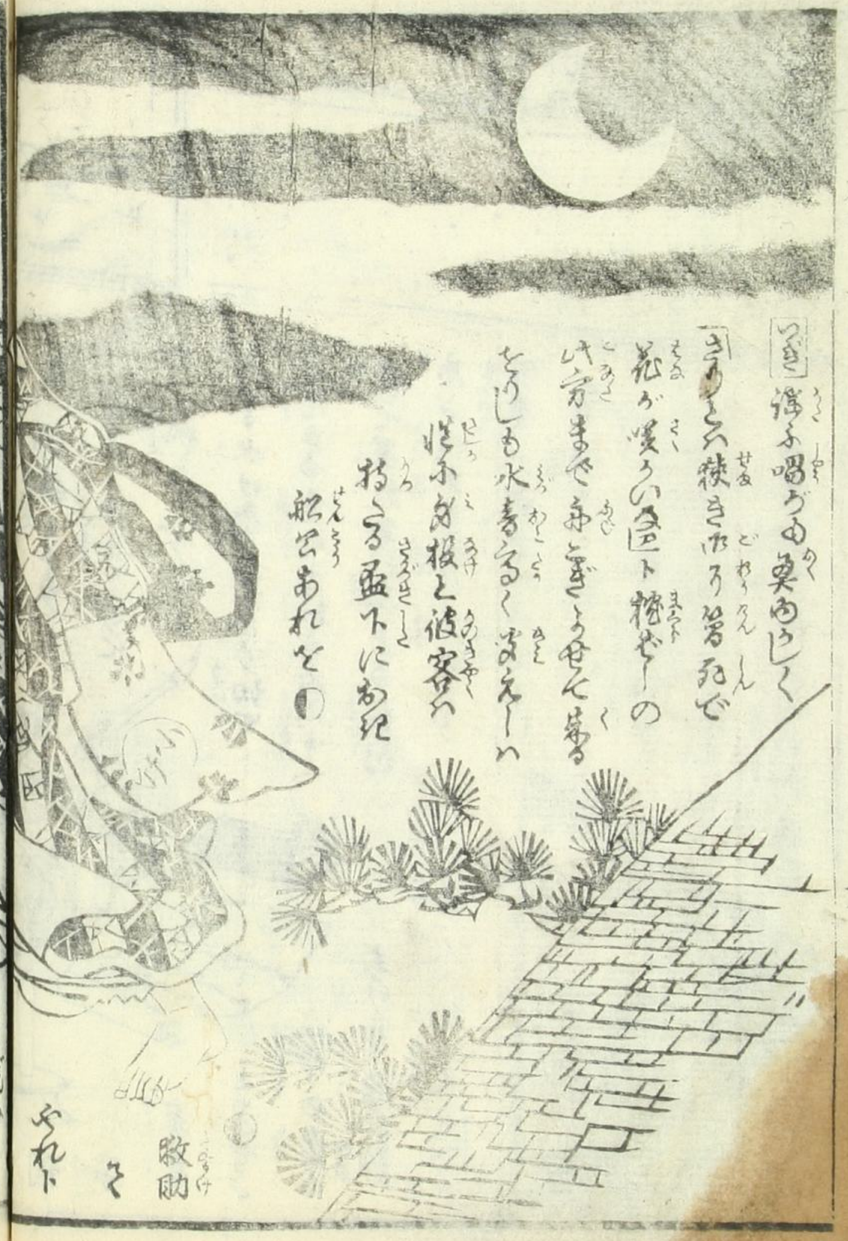

ぐ
ぐ



◆蓮の蓮華へ

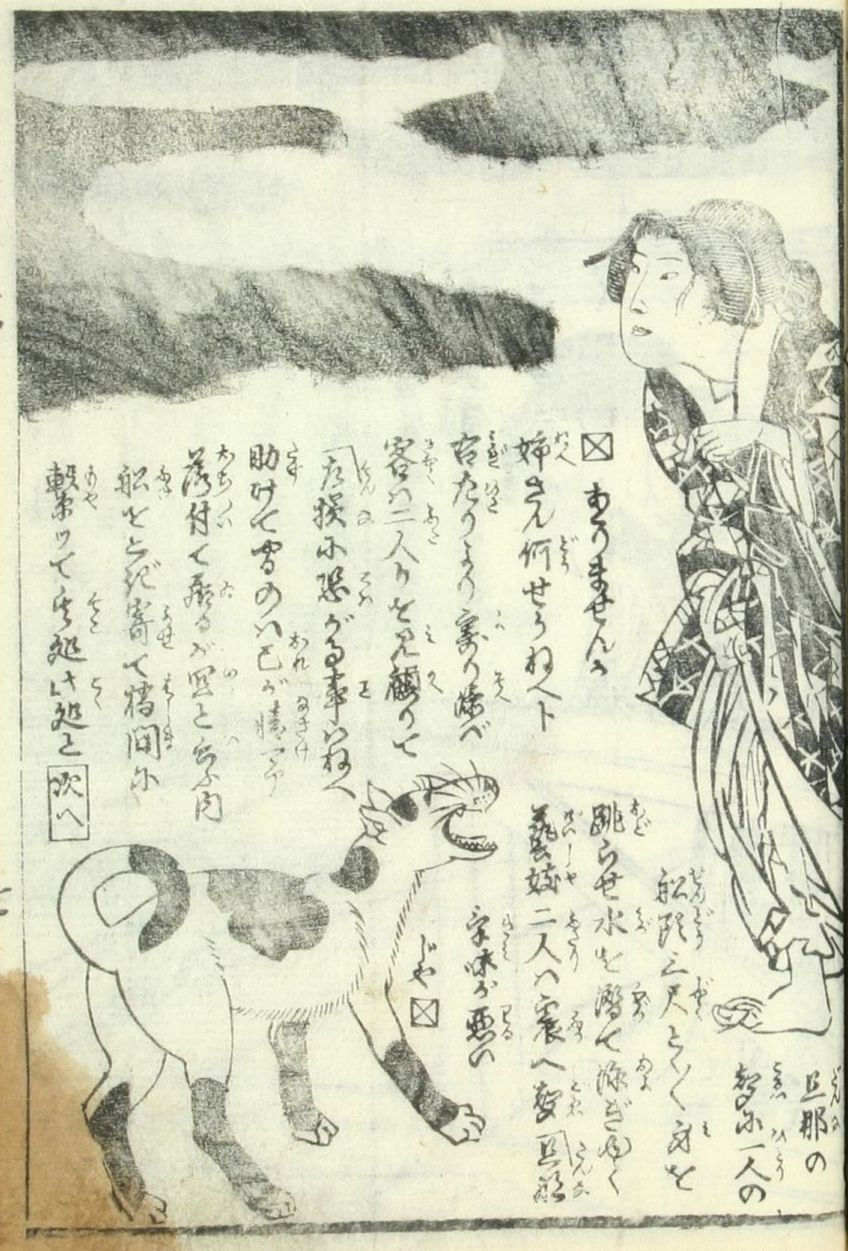
◆輝くうめくと
稼干ホ尺足うまれて
家を跳らー ザンブと
立る水けむりのんどり切て
当逆さま堂死も知る川中一
落て果敢なの輝
朱ざ咲出世食の光あてう
世帯の夜嵐ホ吹折也
とも痛まー 花
○上湯ゆう寄る家根と丹ハ
二人紅葉の渦を付表系塗り
の内巡 紀干ホ波合の折橋

侭
寒月
とんせて
一中の音も
あげる夢び釣
お客一人ホ猫二人 次へ



つゞき 深ふ喝ゐの奥ゐしく
きすりと狭き水路ろ岩石で
船が受ろの臣ト称ぜーの
ひ方まで永とぎろ生て居る
たりしも水者るく流えーい
性ふ対抗と彼客へ
打ろる盃トにあれ
船宮あれを

敗助
を
ぞれト

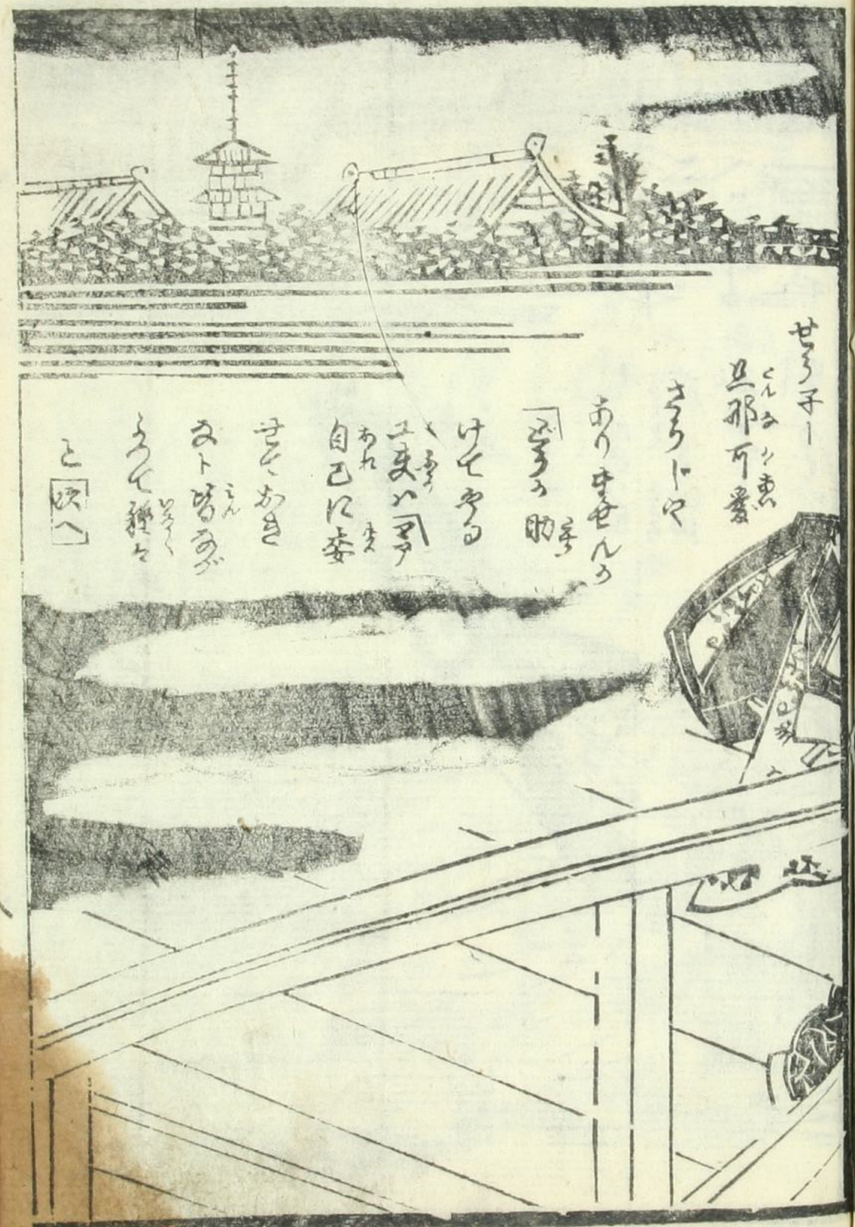


☒ ろまませんゝ
姉さん何せうねゝト
吉たりまり寄り添べ
客の二人りをえ顧りて
たゞ接ふ恐ぐる事ねゝ
助けて雪のいゝ色が情ゝ
義付て張るが宮と宮内
船と宮客て情間ふ
軽ツて生延さ延と 次へ

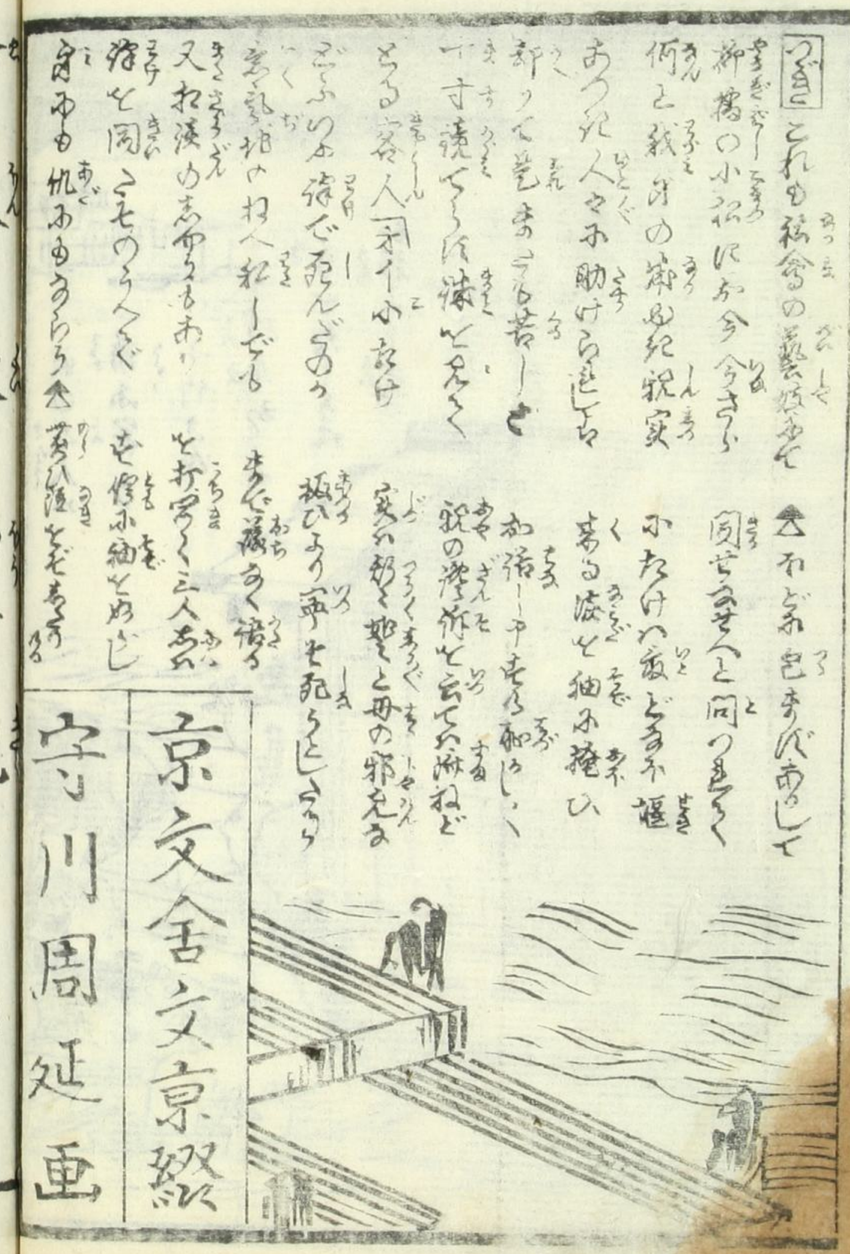
巨那の
智ふ一人の
紅蹴三尺ろく対と
跳らせ水を潜て源ぎゆく
義姉二人へ寝へ安巨那

家味ろ要の
じや ☒

つき
船頭二人は水ふね
漕やくにしてを小竹力丸殿
船の中へ枝ひ上げ客と
義経姫はなをびつくり
とくに丸殿は義経姫の小竹
あくに懸る所の小竹さん
まうぶ使でおんぐるのう
くの
事で
ぐざん


せうこ子ー
旦那可愛
さうトヤ
あり生せんう
「ぞうか助
けてやる
工夫は司ア
自己に安
せてかき
みトなるぞ
うて殺さ
と「吹へ」

波の三人ハ
焼ゐ寄り
小竹さん
確半あるよ
ぎとたゝ〜ろに
お指よト云ふ
ぐにとび
ぎつ厨ちす
ちたゝ
ちたゝ
ちたゝ



京文舍文京綴
字川周延画

繪本太豐記 之編

隅田川月梅若 四編

太閤記切附本 郡司逸なぞ切付

御届明治十三年六月十日

東京 地本錦繪問屋 日本橋区米沢町二丁目八番地 出版人 堤吉兵衛

日本橋区横山町二丁目十七番地 大坂府平民 編輯人 渡邊義方

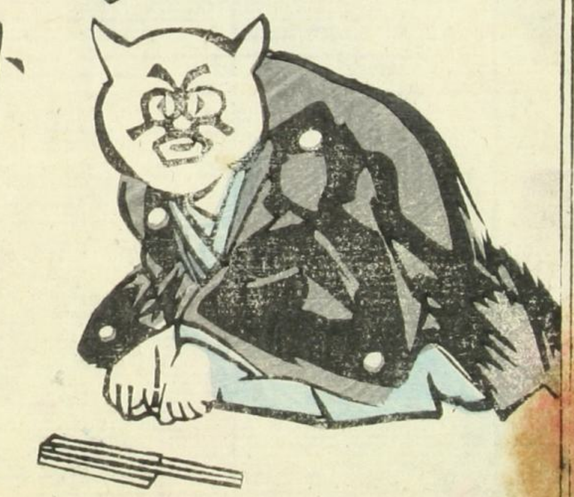
守川周重圖重
下之巻
青盛堂梓

賀
和

きつね

おいしい屋むこ

之巻の下



文京堂　東京　假名垣魯文　校閲

重国　京文舎文京　著述

歌川吉板

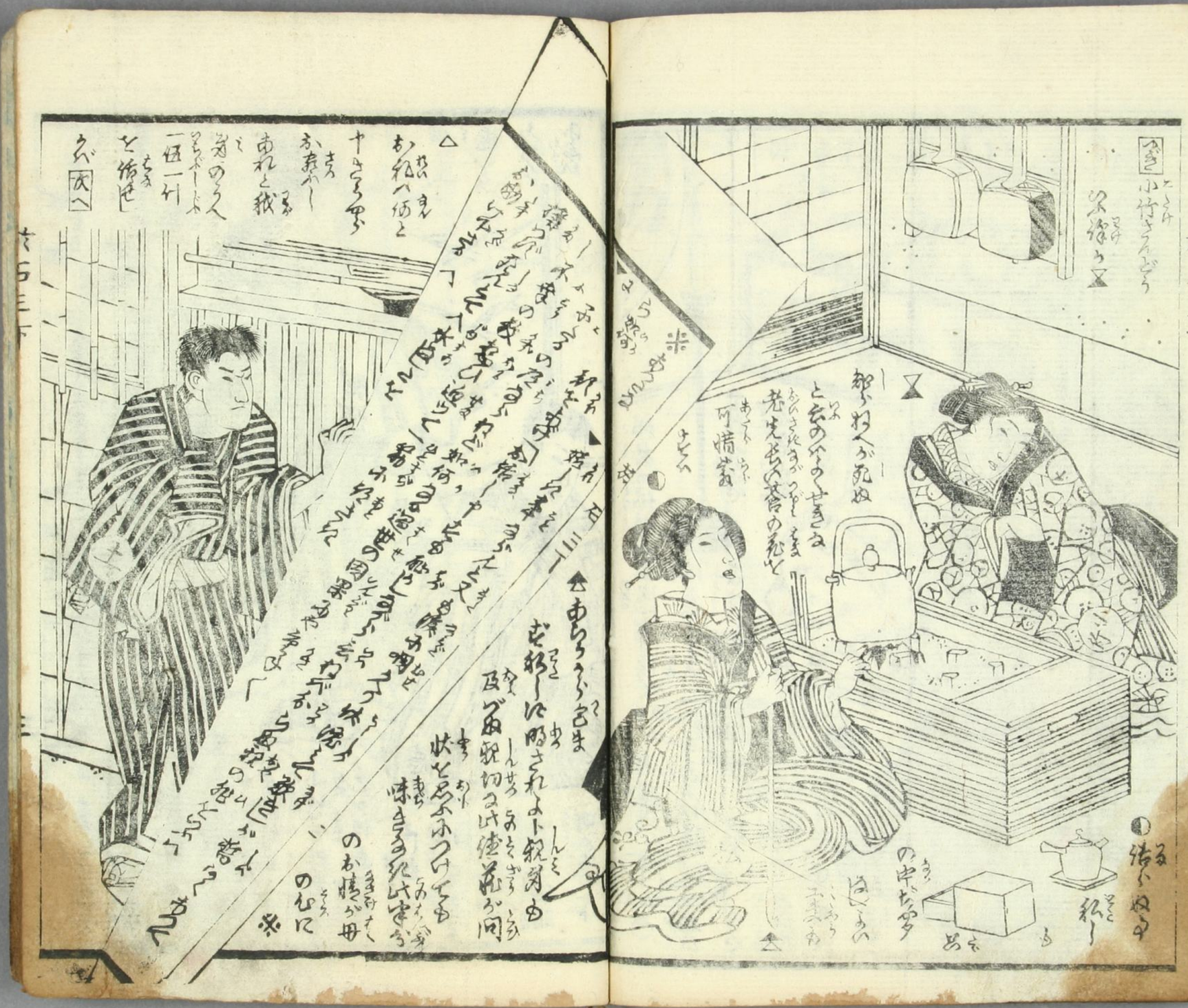
文京堂　東京　假名垣魯文　校閲

牧山　冬之　児立圖鴉　第三編　下之巻

東京　京文舎文京　著述

御殿くゝ小竹い邪見な母親が今ゝ始めぬ玉程雖別自分ハ絶ず心を苦
書を考ひ乳母ハ此とゝ今ゝとゝ出て出ける時のいろ〳〵の事ゝ父母
持ち主母ハ好ん今ゝ武士ハ彩ゝ多紀身ハ深栄の流ゝ比いろ〳〵深ざん
苦労の感事を考へんゝ〳〵と思ひめと如仏の一下筋ハ絶て中きに
是ハ清紀陽四川ハ水家あ母水底へ身を跳らして乗入ハ深ゝ処を
好くゝ上流ゝ乗る船の中ゝ男愛顧ゝ〳〵る女石所ハ絶ゝ
本盗徒花とゝ人ハ敢ハ上ゝ絶ゝと夢紀奴拉宝〳〵ハ命数ゝ
づや宗ゝ恩ち急とゝ行ゝ〳〵藤ゝ〳〵四方ゝ〳〵ゝ徒花めゝ同業
の二人度ハ五度一度〳〵ゝ義ゝ安き物ゝの義妹小松　西季の二人出来ハ

徳
松



▲事をせびと
小竹さんも私の家
仇の子と家が入り手
ちうと愉快うく
家引て来ようり
小竹を伴連なり
己が住居の折
也し輝き
風呂屋
下芸妓
小路の同朋
町奥の一ト

一刻の失礼
ぞ紙もかしこ
ありどうにかあの
お袋ゆ変を信じ
しと上ぜ安んの出来
やう流と樽りとつけて
帰るうち必らずお祖しる
さるお先生さん小松の
宅へ誘れて来て飯まり人ゆ
あつ是程ぢう男ぶるが出一
小松さんも家の毒ぞ伴弓
同士の身故ゆ小竹さんを

▲新ろて
巴の中お前の
地ゆ夫お妻さを出へ
私が売るうち お新ぢ
トのふて

▲小松へ
御笑ぶ「何ぞう
子ー旦那を換なあ奥へ

▲問へ思ゞ
あれ
帰く
世話
とぞ巴
なりる
依怙贔
へ
まし
て

徳
松

父
小竹

つき
しぶ小枝い
徒羅ふ者
むの氏私しの
実の父
さんへ今
い者伝弟
逆ふ
母さんと
おれて後
久しく
十
冥の考ゞ
彩と待て
待つ
十一
一寸行て
ふに徒
義
飛ます
れど尋
ねく
行て
今度
の雛
後委
しく
待
さ事あるい
ぞうとる彩とね後おき
ふるて冥きの物でもあれば今ら
き時けを
知らず
何年で
私を
引て
待
ふ
さらば
奉い義
私しも
行ふ行
経ゆと
気に私
張一袋し
小林八文
の伝蔵へ
と宣を
先やめく
急ぎゆた
母の亡義樂や
徒羅か
奴のつとめでも

十
仙

つぎ
モウけ
松

藻汐草近世奇談　初編より引續出版
松飾德若譚　六編より追と出版
今ノ朝の春　三組盃　三編より追と出版

御届　明治十一年十二月十七日
東京地本錦繪問屋
神田區仲町一丁目六番地　編輯人　籐田久次郎
日本橋區米沢町一丁目七番地　出版人　堤吉兵衛

御届　明治十三年　月　日
米沢町一丁目六番地　出版人　堤吉兵工
横山町二丁目十七番地　編輯人　渡辺義方

010190512008

参覲奏

三冊之内